

～古の宿場町に想いを馳せて～  
研修視察報告(長野県・塩尻市・奈良井宿)

議員 前 田 卓 秀

木曾路はすべて山の中である、の有名な書き出しで始まるのは島崎藤村の小説「夜明け前」。私たち村議員一行は5月13日午前中の小布施町の視察に引き続き昼食後、バスは山また山の山間を縫ってひたすら南下し塩尻市(長野県のほぼ中央、北に松本市、人口約6万7千人、セイコーエプソンの企業城下町)を目指した。1時間ほどで市役所に到着し、案内の教育委員会の石井氏に同乗してもらい、件の奈良井宿へ向かった。同じ市であるが、合併によるもので地理的には隔絶している。

揺られること約40分。石井氏が中山道の両側に広がる街並みを説明しながら案内してくれた。この区域は奈良井川左岸に沿い、背後の山との間のわずかな平坦地で、まさしくうなぎの寝床のようなところ。その街の中心部を中山道が貫通している。



ちょっと奇妙な感覚に襲われた。人里離れた山の中に突如、孤立した町が現れるという、理屈ではどうにも納得しがたい。おそらく昔の旅人は、特に夕刻この町の光景に出くわしたとき、文明の光に安堵したのではないだろうか?私は江戸時代

にタイムスリップし、往時の人々に想いを馳せた。

ここは「塩尻市奈良井伝統的建造物群保存地区」に指定され、一部補修しながらも昔の街の風情を保っている。新しい集会施設も街並みに溶け込むよう工夫されていて、消防の消火施設も調和するような目立たない作りになっている。電柱は裏通りの奥まったところにあり、表通りからは見えない。

おそらく住まいとしてはこの上なく不便ではないかと思われる。家の中は灯

かりがなければ暗いだろうし、冬はすきま風が入ってくるに違いない。通りに面して店舗はあるが、生活感がなく観光客相手の店ばかりで、地元の人たちの姿が見えない。石井氏に伺うと、みなさん車で遠くのスーパーマーケットに行くという。ガソリンスタンドも同様とのこと。

戦後、ドイツでは破壊された町を中世の町並みに営々と復元していった、と聞いている。おそらく中世の世界こそ自分たちの心の寄り所である。そういった矜持があったものと思われる。その伝でいけばこの奈良井宿も観光面でいかにどの貢献をしているかわからないが、それよりも何よりも伝統や誇りを保ち、自分たちの寄って立つべき存在意義を明確に意識している、そんな風に思えてくるのだ。



## 議長の目<sup>アイ</sup>ランド



### \*\*\*\*\* 防災について考える \*\*\*\*\*

日本における近年の自然災害は、ざっと数えても地震、津波の襲来、火山の噴火、火災、集中豪雨や鉄砲水による水害、台風による暴風や豪雨、地すべり(山津波)による土砂災害、がけ崩れ、竜巻やダウンバースト(積乱雲や局地的な積雲の中で発達する下降気流が地表面に衝突して四方に発散する爆発的な吹き出し風)、雹や雷の被害等。

これらは日常生活に突然襲って来て、平穏な生活が一変することになる。又、災害時に発生する電力供給停止(停電)、上水道の供給停止、ガスや燃料油の供給停止、通信網の停止や制限、医療機関の制限、健康面、衛生面では感染症の蔓延、食料、飲料水、日用品の不足等々、一度大きな災害に遭遇すると悲惨な状況になる。

「備えあれば憂いなし」常日頃から何が起きても慌てることなく、行動することが第1と思う。そのためにも、いろいろな事を想定して訓練を積み重ね、有事の時に備える。

これからは絶対安全、絶対安心、想定外などは有り得ない。

議長 戸田 邦 市